# 心中刃は氷の朔日

近松門左衛門作

フシ さりとても戀は曲物。皆人の。地金をへらす燒釘は。敲き直いて意見して燒直いても惡性の。酒と色との鑓や。賣ても燒いても フシ嚙まれぬは。地鐵橋炙床鐵火箸。其のくせ細工は器用にて精さへ出せば一人前。せねば釘拔ぬけていく讀書假名文鑢銚子。とかく萬能一れん物鐵鎚こたへぬ糠釘で。後は吹あけ鞴ふく歌鍛冶屋の。てこの業てつからり。ころり。てん〳〵からりちんからり。ちん〳〵からりと。フシ打上けて。帳面ばかり。あひに合鎚。いかな打出の小槌なりとも。フシ續くべきやうなかりけり。地弟子子大勢使ふ身は油斷させじと旦那から。灰まぶれなる灰猫の顏振り上げて。詞ヤア虎が涙のしるしが見えて空が曇つた。五月廿八日雨三粒でも降らねばおかぬ。嗅や子供が不動參り氣の毒や雨に逢はう。地仁介でも長三でもちやつと傘持つて走れ。大降がするならばお妻が帷子濡さうより。八分位で駕籠を借れ。曙にも足袋を脱ぎやといへ。雪踏を腰に挾むとも新しい紙使ふまい。釘包んだ古反古一二枚持つて行けと。そこ〳〵氣の付く職人のフシ金出來す氣ぞ格別なる。地弟子どもは不承顏。詞雨が降らうが雪が降らうが。平兵衛の供からは氣遣はござらぬ。地堂島新地蜆川茶屋閻屋煮賣屋で。鍛冶屋の大盡平樣と誰知らぬ者もない。平兵衛殿傘の五本や十本を借り兼ねはしやるまい。私等が持つた傘では。お山衆の濡れかけは堪るまいとて動かねば。詞親方利右衛門やいこりや〳〵。又しては己れ等が。讀りはしりに兄弟子の中言をいひをるか。アノ平兵衛めは此の店を任する程の久しい者。なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない。地平兵衛が眞似したら汝等當が違はうぞ。同じ樣に己れ等が文の使も仕をるけな。連立つたも知つてゐるあの邊は人を釣る。甘い餌にくひ付きお山の味を喰ひ覺えたら。それ限りに追出すと苦々しく言ひければ。詞いえ〳〵私や文持つてたつた一度。仁介は先度も連立つてお山喰うて來たけな。エ、あの人の嘘つきやる。俺がどこに喰うたぞ。ヲヲわが身先度いやらぬか。本山寺の開帳から平兵衛殿と新地へいて。喰うて來たとサアなんと言やらぬか。わあいそれはの。平兵衛の茶屋へ連れていて。旦那樣にいふまいなら甘い物くはせうとて。地主は奥の座敷でお山を喰やつたさうなれど。私は端の上り口で鰻の蒲燒ばつかり。お山は口へも寄せなんだが面妖な鰻といふものは。喰へば喰ふ程お山がくひ度うなつて來る。ど

んな物ぢやと笑ひける。親方も返答を傍へ外れたる鏈の音。てんてん天氣も照降り雨に五十餘りの女房の。取つて置きをば濡らさじと嬉しや此方さうなとて。走り込みしは誰でござるぞ何方からぞや。詞ハテ、御免なりませう。大文字屋の利右衛門樣とは此方か。北野鐵鏈煎餅三郎兵衛と申す者の女房。此方の若い衆平兵衛殿ちよつと呼出して下されませ。ハテ、なか〳〵や。平兵衛は今日噪や娘が不勤參りの供をして。此方の近所へ行つたが今に戻らう。煙草でも喫んで待たつしやれ茶進ぜやと言ひければ。ア、お構ひなされますな。平兵衛殿とは不圖した緣で懇に致し合ひ。今では親子同然。疾うにも内方へもお禮に參る筈なれども。地女夫の手ばつかりの商賣。手があけば口があくで自らの御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで。御家樣にもお目にかゝらうと存じ參りました。詞是はとゝの手燒の鐵鏈煎餅。樣に進ぜて下さりませ。皆平兵衛殿の傍輩衆か暑い時分にあつい仕事。地御大儀でござんする。あれ〳〵辻迄平兵衛殿お供して見えまする。お家樣さうなといふ所へ内儀娘平兵衛が。差掛傘の印にも新地の平野屋墨黑に。櫻の丸の花の露ッシ花の雫もなまめきて。地人々歸ればヤア戻つたか。詞雨に逢うて氣がせかうなあ。いや〳〵平兵衛の近付多うて。傘も借つたり休んだり。地ゆるり〳〵と蜆川の新地を。お妻に始めて見せましたと。語ればお妻もなう父樣。詞平兵衛の案内で。美しいお山衆をたんと見て來ました。ヲ、そりや能い慰み一段〳〵。北野の煎餅屋のおかた平兵衛に逢ひ度いと。先にから待つてぢや噪。土產がある禮をいや。煎餅屋殿も先づ内へと。ッジ亭主は奥に入りければ。地ア、お家樣で御座りますか今日は宿に居りましたら。濟いお茶でも上げましよものお殘り多やと挨拶す。詞さればの事平兵衛の懇ねてから寄りませう。地あれ皆お霽飯の時分ぢや。サア先づ内へそれ平兵衛。馳走しややと人あひよくオクリ皆々〳〵奥へぞッシ入りにける。地平兵衛四邊を見廻し側へ寄つて小聲になり。詞なんとして御座つたぞ今日立ちながら平野屋で。小かんにちよつと逢うたれば物案じ顏して今夜中に。地是非ともちよつと來て下されひよんな事が出來ましたと。跡先もなう言うたれども供の事なりや二言と聞かず。おうと言うて戻つたがどうした曰くぢや氣遣な。萬事此方を賴んで置く。何事が出來たぞとッシ恨み。顏にぞ見えにける。地女房もはや涙ぐみヲ、道理さりながら。つい言うて濟まぬ事せかすと樣子を聞かつしやれ。詞今迄は私が身を小かんの肝煎取次のと此方へも隱したが。眞實は私が姉の子現在の叔母姪。地父親は播磨で鷹匠頭の奉公人。五十石に五人扶持二本指いた人の子なれども親御前が殿樣の御秘藏の鷹を外らし。お氣に逢うて浪

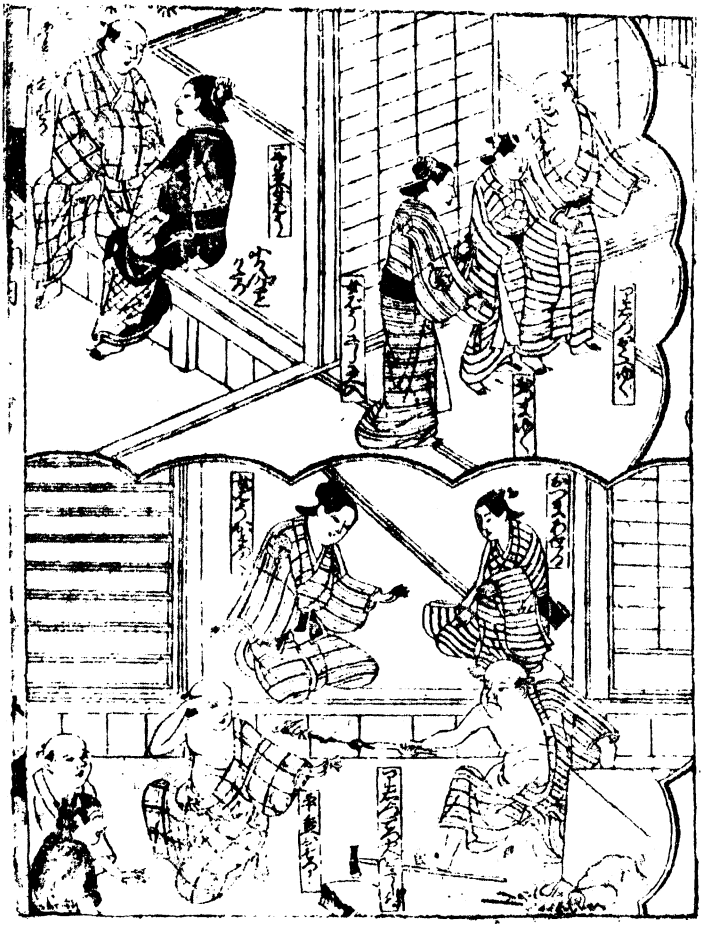
人しあの子ばかりを大阪へ。叔母を便りに何方へもしつけてくれと上されしが。折節悪う不仕合こちの夫の長煩ひ。やう〳〵本腹めさつたりや一昨年の大地震。私は氣癪で床に就き身代どうも立ち兼ね。既に邏を破る處。詞あの子が私等に隠して。肝煎頼み堀江の茶屋へ。三年を十二両に身を賣つてくれました。地私は聞いて目をまはす。夫は男の腹を立て。身こそ貧なれ大阪三郷隠れもない。鐵鍋煎餅三郎兵衛が嗚が氣色が本腹して。千年百年生きようが大福帳者にならうが。女房の姪に身を賣らせ其の金取つて立つものか。腹を切るとて喚かれたを可愛やあの子が涙を流し。詞叔母様許して下さりませ國の父様母様が。浪人でなければこな様達へみつぎの筈。地其のならぬが悲しさに私が身を捨てました。他人でもある事か叔母は親の片割。こな様達計ちやない國にござる母様への。孝行と思ひます。叔母様を母様と私や思うて居まするとと。病みほうけた叔母に抱付いて聲を上げて泣きやつた顔。今に忘るゝ事もない其の陰で人参の。百服餘りも飲んだ故。病の根を抜き此の様に身代の尾も見せず。暮すは小かんの孝行ゆゑ。こな様元は知らぬ人小かんがいとしがる人と。いうて互の懇あひ命を助け身を助け。姪ではなうて親ぢやものの如在にせいと言やつても私等は如在はないものを。恨みが結句で聞えぬと。四邊を忍びしく〳〵と フシ泣きくど。きてぞ語りける。地平兵衛手を合せ。餘り氣遣せつなさに恨みらしい詞つき。賈平々々御免し。此方を叔母御といふ事も。小かんが言うて知つて居る。先づ此の度ひよんな事出來たといふが氣遣な。落付かせて下されと フシなほ氣をせくこそ道理なれ。地ヲヽされば いの。内々國の親御前へ茶屋奉公は隠して。大阪の歴々の奥様へ預けた分。地所に今度小かんの兄御。殿様より呼返され御奉公にありつかれ。それ故あの子を國で縁に付けるとて。乳母の息子の乳兄弟が。昨日の朝おつや様迎に來ましたと。幼名いうて上つて。詞安治川に宿を取つて居る。こちと女夫は當惑して。様々思案して見ても。今で請出すあだではなし。恥を捨てて言うたらば國の迎が藏屋敷で。つい金を調へ國へ連れて歸らうし。時には此方と縁切れるどうしたものであらうと小かんに問うて見たれば。詞いとしやあの子も泣入つて。國へ歸つて親達の顔も見度うはござれども。平さまに一寸も離れうとは得言ひますまい。地叶はぬ首尾に極つて國へ下るが定ならば。私は見事に死にまする叔母様を頼みます。國へやらずに平様と永う添はせて下されと スエテ 歎くもいとしゝ道理なり。恩を受けた大事の姪こゝは一つと思うても。手業にいかぬは金事國の迎は早うといふ。あの子はどうぢやと氣をせきやる證方つきてこな様と談合に來ました。詞三年を十二両一年半は勤める。殘つて半金六両なれど。ひき日の

なんのとてつきり七兩は入りませう。私が方で二兩二分は身の皮剝いでも調へましよ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して。地こなさまと疾うから夫婦にしたと言ひなし。國へやるとも女夫づれ契入させて濟ませども。其の四兩が見えぬ故大事の姪が望も遂げず。死生も出來かねまいと思へば胸も塞つて。今朝は重湯ばつかりで何も喉が通らぬ。是程しきでこな樣へ身代打明け話す事。恥かしい口惜しい。無念にござると手拭もフシ絞る。ばかりに泣き居たり。地平兵衛はあと吐息をつきはて扨思案に行當つた。詞私も近年彼女故に旦那の懸も何も彼も。地しやちらさんばう近付中に痛手を負ほせ。動かれぬ身になりし故。詞ちと借錢を輕めんため味な商賣からくんで。三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束。地はて頼は面此の金請取り次第遣りませう。二分や三分の足らぬ口それは其の時どうもなる。何とぞ首尾して小かんを手に入れる樣に頼みます。國へ下るに樅れば此の平兵衛から死にまする。二人の命を助ける慈悲本の後生になりませう。叔母樣偏に頼みますとフシ又手を合せ泣きければ。地いや頼む事ではござらぬ私が身にかゝつた事。其の金さへ調へば何の案ずる事も無い。ちつと胸が開いた平野屋へも立寄つて。小かんに言うて落付かせうそんなら早う歸りましよ。内方へも宜いやうにと出ずればこれ〳〵此の傘。小かんに返して下さりませなう〳〵是は幸と。さいて出でたる傘や虎が涙も引替へて。丑天神の野邊の露消ゆる間。近き三昧〳〵命なりフシ見送る道も。しみづきし。地草鞋に編笠の田舍商人二人連。詞ヤア平兵衛殿いかい暑さでどざるの。謎物ども出來ませう。今日請取つて金も濟し明日下りたうござるといふ。如何にも〳〵上物は皆出來たが。急な細工がつかへて中から下の並物が揃ひにくい。地金を先金を拵つてござつたか何程持つてござつた。四兩あしもござるかとフシそゞろに高をぞ聞きたがる。地いや上物さへ出來たれば並は遲うて大事ない。詞への分算用は今日殘らず。仕切つてと。腰の打飼取出し。地先度手附に一貫文渡し。今三兩三分相場は金六十目。地錢十五匁合せて二百四十目。仕かけの代に引がない此方の方には是が得。ちよつと一筆請取して出來た分下されと。言ひも了はぬ半分聞き三兩三分に掴みつき是でざつと濟みまするまあ二分や一分は叔母がどうぞしやりましよと我許り含點の數も讀むやら讀まぬやら懷に押入れ。請取でも手形でも起請でも仰付けられと硯紙取出しこれ旦那樣。詞上物の裏金二千足戸棚にあらう。地取出し下さりませフシとぞいきりける。亭主は裏金束ね乍ら持つて出で。詞平兵衛が話で聞きました。大和の雪踏屋殿は各でござるか。是はあはぬ細工私が聞けば請取るまいに。平兵衛が在所から懸

仲ぢやと申して何處でやら請取つた。地重ねてかうは成りませぬそれお妻お茶進じや。あいと返事も色づきし赤絵の茶碗手に据ゑて。出端一つあげましよと差出せばこれは〳〵。忝いと取らんとせしがいや〳〵。お茶はたべますまい。御無用になされといふお前はいやならお連樣。いや私も御免なれ。平に一つ上りませ。何しに御辭儀申しましよ兩人ながらお茶はえたべませぬ。そんなら素湯でも上げましよか。詞いやいや所望にござらぬと。地言へばお妻も打笑ひハア愛想もない事や。こりや仁介煙草盆持つて來いとて入りにけり。仁介が奥より煙草盆鍛冶屋炭火のおこり立て。ある火は置いて懐中より火打に火口打出し。煙草のむ身は石の火の。光の間をも待兼ねて フシ身の程知らるゝ果敢なさよ。地亭主是に心付き。詞いづれも大和のお茶とある。奈良郡山左手右手。吉野郡の奥迄も雪踏屋茶は皆存じた。地御兩人の御在所は何處と問へど聞かぬ顔。あちらへすべらし紛らかし只名所を隱すにぞ。平兵衛も親方に根問ひさせては悪しかりなんと。サア請取は了うたり渡して早う戻しましよと。取らんとすれば亭主抑へて。詞イヤ此の商賣はせまいわい。銀請取つたら早戻せ始め聞けば請取らぬ。地あの茶は大和の金銀たんと持つた村の。牛馬迄持つた樣あの茶の誂物。此の利右衛門は請取らぬ。我等が家職に瑕が付く。勿體ないと搔き淡へひん抱へて奥へ入る。先づ待たつしやれそれでは私が立ちませぬ。損の行く細工でなし金に一厘不足なし。手附取つて手形して渡す段に變改して。職人が立ちますか樣子があらばある迄。それなら私が内證の自分仕事にしませう。時には家に難付かず瑕がつけば平兵衛が瑕。渡さねばならぬと取付く所を突きこかし。はつたと睨んでうつけ者。詞瑕が付けば平兵衛が瑕とはどの口でぬかした。此の利右衛門が目代にして。弟子手間取をも引廻す己れに瑕を付けまい爲よ。京御所方の御普請の下細工の釘請取り。火水を消める最中に正しうもない金を取り。伴ひつき合ふ己れが先いきせうと思ふか冥加があらうと思ふか。地五兩に足らぬ腐り金寶の山と惜しみ居る。根性のかひなさで商が ならうか。地結句丁稚の時分には人にもならうと思うたが。エヽごくに立たぬ根性と涙を浮め歯ぎしみし。向ひ隣へ聞えぬ中金を戻して往なせをれと フシ怒り。けるこそ尤なれ。地平兵衛至極に詰れども懐の金に離れ難く。ようござる今の間に私が打つてやる。地鐵は跡で算用と横座に直つて足蟇。地鐵打ちくべ吹き立て〳〵丁稚ども。傍輩の好みに相鎚一つ打つてくれ。平兵衛が一生の恩に受けうと頼めども。親方の顔色見て。誰が詞の相鎚さへ フシ打つ者とてはなかりけり。地平兵衛恨み泣き。エヽさうばせぬもの聞えぬな。うぬ等が草臥れ眠たがる。時には俺が代りをして二人前を働

いて。宵から寝せたり休ませた恩徳を忘れたな。よい帽まぬ置きをれ更金千足や二千足平兵衛が片腕。半日の仕事に足らぬ親方傍輩一つになつて此の平兵衛が。分すてさせ。此の首尾なら死なうも知れぬ死んだらば此の念。己れが首引抜いしとて。こく〳〵とうしらこく〳〵。とて。〳〵と打つ鋪に落つる涙もこぼれ添ひ。湯上りとたぎるばかりなる地親方一間に飛んで上り鍵金鋏取つて投げ、朝晩

請める鐵床に涙をかけん罰當りと、鏈の柄を押取直し胴骨四つ五つ。即付け〳〵己れが敵は此の金と、懐に手を押入れこれ金を返せば言ひ分ない。此方には請取らぬどこで外で誂やと。投返せば二人の者詮議無益と思ふ顔。詞手附の一貫覺えたか。地平兵衛重ねて取りに來ると、言ひ捨てでこそ歸りけれ。地平兵衛わつと大聲あけ。スエテ四邊も恥ぢず。敗きしがさりとては且那殿舊功なした飼立を。



可愛が定が憎いが定か只今のお詞は。弟子子不便な言ひ樣で又此の仕方は平兵衛に。首縊れとのなされ樣鍛冶の道一通。火を清めるといふ事は商賣なれば知つてゐて。其の上でする商一旦はさもあれ。一生主に逆はず詞一つ返さぬ此の平兵衛が是程迄。逆うて申すからは。身ぬけのならぬフシ譯ありと。大目に見て下されて。其の御恩を忘れる平兵衛めでは無きものを。但し金を引込んで損かけうとの氣遣か。・圓年の切は去年明け。身を質に置くからはお氣遣は無い事。平兵衛が身一生いきる瀬か死ぬる瀬の。大事の金に行詰りやう〳〵大和の宿村が。地誂物を天の與。時の間を合せたく奉公して十八年目。始めて旦那に叱られ能はぬ身には能はぬ金。命を捨つるも世の習ひ。それに悔みは殘らねども。額に毛拔も當てるもの店のさきで晝日中。町の衆道行く人友傍聖も見るぞかし。丁稚小者をするやうに曲もない撲ち叩き。脊骨は折れうが碎けうが。打たるゝ鎚は痛うない。哀れを知らぬ親方殿。見て居て打たするお家樣やお妻樣の情ない。お心の金鎚が身節にこたへ浸み渡り。痛い悲しい恨めしいと。泣いては恨み恨みてはフシ我が身の。科を悔み泣き。色に迷ひの心の闇フシ推し量られて不便なり。地親方いよ〳〵腹を立て。圓鹿を追ふ獵師は山を見ずとは己れが事よ。お山狂ひに眼が眩み。人の理非も身の上も一寸先。脇が見えぬよな。己れが身の立つ事ならば彼等に商する迄なく。五百匁や六百匁は此の利右衛門が出し兼ねぬ。使うても〳〵止りの知れぬ惡性金。氣儘にさするは己が身に毒飼といふものよ。地内外の者も町衆も三人寄れば己れが評判。聞いて無念な親方の心の内を推量せよ。圓先にも仁介長三めが。噂をするを叱りつけ今で彼等に面目ない。去年の春から際々に。或は百匁八十匁懸の算用不埒にて。いつの際か帳面のさつぱり濟んだ事がある。それのみならず堺筋の絹屋から。紺糸子の女子帶五十六匁。緋縮緬八尺三十五匁といふ書出。覺えが無いと返せども跡からは持つて來る。不思議な事と思うたに今日といふ今日内の噂が。緋縮緬の正體を見屆けて歸つた地ヤレ勿體ない冥加ない灰まぶれの鍛冶屋の仁藏。身にさへ着にくい緋縮緬に。足を四本踏込んで其の罰は何とせう。身の行末が可愛やとスエテ聲を上げて泣きければ。女房娘諸共に。惡う聞きやるな平兵衛とフシ共に袖をぞ絞りける。罰利生ある親方にて涙を止め。圓こりや平兵衛。言うて居ては果しがない今迄の事皆赦す。是から魂入換へ世帶を持つて出る迄は。茶屋の見世へも上るまいお山と詞も変すまいと。きつと誓文立てうならば此度の金だとへ四兩が五兩でも。今出して取らするがサア何と。と言ひければ。地平兵衛飛びしさり兩手をついて頭を下げ。申しお家樣お妻樣。旦那樣へ能言してお禮申して下さりませ。道

知らず恩知らず大悪人ゆ私に。金迄出して此の難儀お救ひに預る事。親も及ばぬ主の慈悲今日は祝ひ月。廿八日御縁日不動の刄に喉吭を突通され身の家職の鐵床に。打ちみしやがるゝ法もあれ又や再び悪性事。ふつつと思ひ切りましたとフシ涙を流し言ひければ。地ヲヽ出來しやつた〳〵それが其方の身の果報と。皆々悦び褒めにけり親方も機嫌を直し。詞さすが男ちや満足した。此の上ながら此方の心の落付くため。地誓文の證據にと三尺許りの棹鐵の。夕日の如く焼けたるを鐵鋏にて引出し。鐵床にどうと直し。詞是は此の度禁中様御内侍所の釘下地。此の内侍所には日本の神々御番ある。八萬餘座の神の司の御寶殿。地其の釘になる黒金。今の誓文偽りないと見る前で鐵火を握れ。心に誠ある者は氷よりも冷かなり。少しも偽ある者は腕焼け爛れ落つるといふ。佛神に嘘はない其の方も發起して。今の誓文立つるからは熱い事はあるまいサア。握れと言ひければ。平兵衛色變り。只はゝ〳〵とばかりにて フシ跡しさりにぞ成りにけり。地女房笑止がりハテこゝな人狼狽やる。思ひ切つたが定なれば鐵火に怖い事は無い。但しは當座まかなひに金取り騙しの空誓文か。さりとは悪い合點一生の病を抜き。身の上の固まる事さつぱりと思ひ切りや。思ひ合うた馴染の仲離れ難ない筈なれど。それは一度の皮切なんほいとしい戀しいも。身が立たねば叶はぬ事但し思ひ切られぬか。サア否應の返事しや。どうぞどうぞと手詰になれば平兵衛。顔も心もうろ〳〵と否と言へば主人の慮外。應と言へば年月の。小かんが情仇となる。思案涙に胸つまりなう旦那様お家様お妻様も頼みます。其の御返事は私が身に成り代つてどうなりとも。恩ひわけて下さりませ。鐵火は御免とばかりにてスエテかつぱと伏して泣きければ。地親方も是迄と焼鐵おつ取り大地へどうど投付け。詞エヽだまされた騙られた。十八年以來たとへ犬猫飼うたりとも是程にはよもあるまい。地半時も内には叶はぬ叩き出せと飛びかゝり。腸骨をどうと踏む情なき丁稚ども。柄長の金槌手んでに押取り目鼻も分かず打ち出す。平兵衛大聲あげたとへ撲たうが叩かうが。此の平兵衛はこれの内より外行き處は餘所にない。死ぬるとも此の内から直に死ぬると。駈入るを叩き出し走り入れば叩き出し。難なく辻へ打出し打つて清めの鹽水や。跡は火をかへ水を替へ表もかゆる備後町。へりも切れ果て縁切れてとこばな。れ行く 三重戀路なり。

## 中之巻

戀草の。フシ種植ゑんとて。地固めしは。神か佛の堂島を來て見よとてや田養橋。夜々を重ねて大江橋。橋のゆき桁雪ならば。幾度袖を拂はまし。スエテ花の吹雪の櫻橋。梅田の縁曾根崎の。青葉隱れの鳥の音も。法華長屋の名を立てて。地神祇釋教戀無常。

中に、めたる中町や其の家々の吉野川流れの数の多ければ妓が情の花の網に掛け取られぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身を捨つる人はなけれど取りわけて。地平野屋小かん、まきは。語るも聞くも、ッシあはれなり地今日は六月朔日の正月納めの紋日ぞと。思ひ〳〵の揚の客小かんは田舍の侍に。初手は内にて二つ目は濱筋の和泉屋。さがが許へと出かけたる。女子亭主のわけよしが穗長の煤を打拂ひ。人に情を掛鰤のむしり肴と春めかす。其の缺餅の氷より。涙の氷とけやらぬ。ッシ憂き身の上こそ無懶なれ。地あれ〳〵勝曼參りの妓樣たち。濱龍が戻るといふ中に。はや表迄舁き寄せて雇打上げコレさが樣。詞今下向しました小かん樣こゝにかゝなさゝま參ると言はんしたが道寄りせずにおとなしう。早う下向さんしたそれも合點。地早う逢ひ度い人があると。ざざめき戻る濱龍の數々。衆人愛敬愛染の。威德も見えて、ッシ頼もしゝ。地さがもそれ〳〵挨拶して。松屋丸屋河内屋の。妓樣達もこちの揚で參らせましたが。遲い事やといふ所へ。程なく濱龍を舁き入れ、皆樣ゆるりとやらしやんす。道頓堀でござんしよの。詞よい推〳〵。二十郎の初日見て。芝居では大酒戻りは濱龍で蒸し立てる。暑い事〳〵。地此の暑さでは霞亂して信田森の恨み葛水。一つ飲ましやと喚きしが。ヤア小かん樣。詞こなさんは參らずか定めし夕べ平樣と。手を引合うてでござんせう。小憎い事やと言ひければ。地小かんはつと肘に染みさうした事ではないわいな。今日の客は一見の田舍の侍。日が暮れて見える筈。それ迄は愛染樣へ參らうとまゝなれども。心に大願ある故に提灯二つ紋付けて。今日の間に合ふやうにして一昨日から誂へ。今にも提灯出來次第參り度うござんすが。提灯の出來ぬも氣にかゝりますといふ所へ。地提灯屋の息子走つて來て。小かん樣こゝちやけな提灯が出來ました。二つで四匁四分ちやと、ッシ言ひ捨てて、こそ歸りけれ。地嬉しや〳〵さが樣つい參つて來ませう。むつかしながら四郎兵衛殿。詞此の提灯の紋の脇に。書付して下さんせと言ひければ。料理人はお易い事目出度う一筆みしらせうと。提灯あぐれば紋無しに。眞白四郎兵衛興さましこりやどうぢや。地四匁四分で白提灯氣轉の惡い提灯屋。ちやつと紋を書かせて來うと。走出づればこれ〳〵。もうよいわいの提灯屋に科は無い。私が佛に受けられず。順の叶はぬ知らしめさうして置いて下さんせ。やがて梅田へ行く時にどうで入らねば叶はぬと。浮世を拗し言葉の端。一座の妓や下女久三仕直しにやつたらば。詞多分晩の時合にならう。歸らぬ事は悔まぬもの言うて歸らぬ〳〵。歌いうてな。歸らぬ死出の旅。サア飲みかけうと祝うても。定まる前世の約束を、ッシ遁れざるこそあはれなれ。地平野屋の小女郎が風呂敷包打ちかた

け。ァ、あつやとて走り入り、さが様ちとお目借ろと耳に口寄せ。内儀様の言はしやんす。ァノ小かん様には。鍛冶屋の平様といふ間夫のお客がござんすが。様子あつて逢はせませぬ。晝からちら〳〵此の邊で見えまする。門より外へ出しませす。行水も其處で頼みます。氣を付けて下さんせと。ッシ呼き散らし歸りけり。小かんははし〳〵聞付けてさが様今のは何の事。平様の事であらうさりとては氣の毒な。先の人は親方持浮名が立つては職人の。身の爲によからぬ噂人のいふは皆惡口。間夫の何のといふやうな深いわけでは更々なし。今でもふつと見えたらば何處ぞでそつと逢はせてや、こちからとんと埒明けて手を切つて退けましよと。口には言ひて眼は涙さがは五音で推量し。ァ、そんな事氣にかけて此の勤がなるものか。世間の口に戸を立てて錠を卸す其の鎖鍵は。いかな鍛冶屋の平様に誂へてもなるまいと。夕暮近き人目かけも客様達見ふ。ぞや。行燈の用意しや甜瓜も冷しや。湯も取つてたも小かん様もお行水。わしも汗を流さうと奥に入れば一座の色。わし等も行水して來うと。皆々へ表に出でにける。フシ空も涼しき。夕風に。流行る今年の紙鳶雲に舞鶴鳶いか。から風招く唐團扇鬼の頭も色里の。上に揚がればフシたはたよと。しなだれ揚がる藤の花。たがふんいかの。一結其の思はくの紋付けて。袂涼しき小袖いか。盃いかの品もよく。菊や牡丹の花いかを。頂き揚ぐるフシ太鼓いか。鰻瓢簞鯰いか。吹かぬ風持つ扇いか。雲を綯ぐる に異らず。フシ往き來の。人も立留まる。此の内に彼の人の見えかしと紙鳶見る顔で表に出で。上下に氣をつくれば梅田橋の西詰に。淺黄縞に古編笠。ァ、あれさうなが夕顔の。たそがれたどる覺束なさ。先にも見付けて編笠の下目遣ひ眉かねば。心の内に招きあひ目はいかのぼり爪先は。其方の方へ行く水の橋の詰迄そろ〳〵。跡のこはさに身も飽ひ側へ寄りは寄。ッ、ひ。人目にせかれたき何かわす文を見ふ。ら私が氣は。死んで居たそとばかりに。泣くにも涙落ち次第ッ、拭ふも人目つゝ。ましや男は笠のうちしをれ。親方も道理の勘當是もつて恨みなし。其方を國へ下さすば親に不孝の冥罰。行末よからうやうもなし下し度いもーばいなり。別るゝは猶つらし此の平兵衛が胸一つで。本國の親達まで歎きをかけ苦をかけ免しても惡縁ぞやとッシ笠を。傾け泣居たり。あれやう〳〵と忘れて居たもの。親の事又言ひ出して泣かさしやんす。打たるゝ杖も床しいといふものを。拳一つあてられす。可愛がられた現在の親。是は懺悔ちや忘られぬ迎ひに來たは乳兄弟顔恰好は覺えねとも。親達と思うて見たけれども。町方に居る分に言ひなした私が身が。ばしやれた形で逢はれもせず親の事を思ふやら。こなさん

の事思ふやら心を推して下んせと又さめ。〳〵と泣きけるが。地是ではすはといふ時に國へ心が引かされて。未練の出來まいッシものでもなし。地こな樣に逢ひ次第死んでのけうと覺悟をする。剃刀は身を放さぬこれ見さんせと袖口から手を引入れて懐の。剃刀の柄包みながら。男の手に確と持たせ持添へて。南無阿彌陀佛と我が腹に突き立つるを挽ぎ取つて。引つたくればこりや何故に。もう逢ふ事は

優曇華。こなさんの手で死に度いと、フシ呟き。口説くぞあはれなる。男はて悪い合點な未だ人立もある中に。思ふやうに死なさうか其の心底に極らば。まそつと此處に彷徨うて日の暮るゝに程は無い。人顔見えぬ時分に足を限りに何處でも。見事に體を竝べたい平に待ちやと制すれば。地同じくば今茲でちつとも早うと死神のフシ誘ふ命の果敢なさよ。地和泉屋には小かん様。〳〵と呼ばはる。こゑごゑ。

南無三寶最期の邪魔さらばとばかり平兵衛。堤を下りて身をなんとフシ茄子島に隠れけり。地和泉屋の男ども門に出で。そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて太鼓鉦が入らうとしたと言ひければ。アヽ仰山な涼みがてらに紙鳶見に出た。太鼓鉦が入らうとは。朝日さう〳〵祝うてもらうて忝い。地太鼓鉦も鐃鈸も鑼て入らうと涙ぐみ。跡に心は残る日のかけと入りつゝへ暮れにけり。地空に棚引く紙鳶次第々々に引下ろす。中に小袖の絹の紙鳶風を含みて下り象ねしが。絲目中よりふつつと切れッ。和泉屋の小座敷のフシ軒にひらめき落ちたりけり。地あれよあれよといふ程こそあれ紙鳶主大勢引連れて貴ひませうと駈け入れば。四邊近所の血氣の者それやるものかと走り込む。道行く人は是ついでにお由見べしに込入るを。内の者ども抑へても我人差別あらざれば。天の與と平兵衛群衆に紛れ奥座敷の。庭迄どやゞ〳〵入りにけろ小かんは見付け氣をあせる。とかうする間にやう〳〵と扱ひ詰言たらぐ〳〵にて。紙鳶をもらうて立歸れば皆人込みの大勢もフシ殘らず表に出でて行く。地小かんは男を招きあけ逢棚の厨子戸を明け。夫を押入れすはといふならこちらから。南無阿彌陀佛と磬かけう。それを合圖に其の剃刀で。わしが肋骨を横越しに。ぐい〳〵と扶つて。うんというたらこなさんも尋常に死んでドんせと。戸を引立てて。寄りかゝり日に暮歌心には彌陀の名號一筋の紙鳶の絲より猶細く。切れかかり。たる玉の緒の結びつがれぬ二人が命フシ危くも亦無慚なり。地はや家々に行燈あけ面々約束〳〵の。客も見ゆれば酒肴吸物にする蜆川フシ水も色めき賑へり。地小かんが揚の侍も。一僕つれて何とおさが遅かつたが詞小かんは來てかと腰掛くる。是は〳〵小かん樣は今朝から待象ねて。地たんと腹を立てゝぢや振られさんすな怖い事。ぐりいさ先づへ奥へと伴ひける。地小かんは色を悟られじと此の長い日をうつかりと地よう待ちぼうけにさんした。南か堀江が屹度吟味もしたけれど。馴染が無いだけ許してやる。其の代に酒呑ますと挨拶もお仕着の。フシ袂を戸棚に打掩ふ。地北野の叔母は二三日夜も寝ぬ目許とぼ〳〵と。詞和泉屋殿は此方か。平野屋の小かん殿をもと呼び立てて下され。北野蠟鐘煎餅といへば合點。頼みますと言ひければ。地さがも日頃はうす知りの座敷に出でてしなゝ咽き。ちよつと立つて逢はしやんせと。言へども跡の氣遣に棚の側も離れ難く。座敷へ叔母も呼び難くどうか。かうかと思ふ顔客は見てとりアヽこれ〳〵。詞我等は見明日は國へ下る者。お客樣でも苦しうない是へお呼びなされといふ。いや私が叔母樣話し度い事がある。自由なから其の間端へ立つて下さんすか。地何が母々話の時分は立ちませう。近付にもなるため。早う是へと言ひければ。詞さか打笑ひ辭かなゝ。

當世は田舍衆ほど氣が通ると走り出て。これ叔母様お客へ斷り申した奥の間へ通らんせ。地それならかう通りましよいづれも御免なりませと フシ奥の座敷に通りしが。地客といふは國許の迎の人叔母ははつとばかりにて。詞小かんはあの人見知らずかあれこそ其方の乳母の子乳兄弟。こんどの迎に上つた人よ。地ヤア知らなんだ恥かしや。いや其方より叔母が恥。此の勤めさする事國の人に見付けられ。最早言譯ないわいのと。叔母姪ひしと抱き付き フシ聲も。惜まず泣き居たり。地侍靜めて。詞アヽこれ〳〵ちつとも苦しからぬ事。親御達御浪人とは申せども。國では賤しき業もならず大阪は誰知らずいかなる身すぎなされても。名字に瑕は付かぬとて覺悟の前で上されし。それ故他人は差措いて乳兄弟の拙者が參る事。地御内證の恥恥辱承つてよいやうに。 計らへとのお迎ひ如何にしても此の間。詞叔母様の言葉といひ萬事合點參らぬ故。容と詐り方々を問合すれば。平野屋の小かんは鐵鍋煎餅の姪の由。聞居け猶念のため一昨日表向きの御一座。効顔疑なしと藏屋敷にて金調へ今日盡の間に堀江とやらんの前の親方平野屋亭主も對談し。本金十二兩相濟し一札取つて今宵から。自由の御身に致したり。地最早氣遣ばすな私は乳母が悴。 和田傳内と申して家中に若黨仕る。おつや様と御同年。幼名は石松五つの頃迄は。夜昼お側に附添ひ。詞一所に遊び育てられ七歳より男の身は大身小身隔てなく。奥へ參らぬ武家の作法。互の顔は見忘れても。地乳兄弟なり主從なり私迎ひとあるならば。恥も恥辱も振捨てて。御息災な顔ばせ見せて下さる筈なるに。お心迄變つたはちとお恨に存ずると。スエテ侍泣きにぞ泣き居たる。地叔母涙にくれながらさりとては面目なや。何もかも叔母が科。あの人ばし恨みやんな身を賣らせたも我ゆゑ。詞此の度國の出世につき下るは其の身の仕合なれど。あの人も大阪に思ひ合つた方ありて。深い約束遁れぬ仲。そなたに隱して金調へ叔母が力で彼の男と。地夫婦になして年月の望を遂けてやりたさに。身をはたいても煎餅屋押せば碎ける身代の。底を見せたる フシ恥かしや。地此の上其方が心人國へはよしなに言ひやつて。あの子が大坂で彼の男と。添はるゝやうには成るまいか。遙々上つた乳兄弟。よかろぬ事を聞かするも皆此の叔母が身の因果。世の中の浮き沈み子を賣る親は多けれど。姪を賣る叔母は我ばかり。 恨めしの娑婆の境涯やと スエテ聲を。ばかりに泣きければ。地小かんも共に涙に咽び。 知つての通り胆腹一つの兄もあり。妹もあれど如何なる緣にか母様の。私一人が秘藏子で。海にも山にも譬へられぬ。 御恩を受けた此の身なれば。明暮逢ひ度さおゆかしさ身體は大阪に殘つても。 魂は母様の懷に入つてゐる。 是程に思へども生中武士の娘とは。

薄知りに人も知る。遁れぬ義理にからまつて。大阪の土とならねばならぬ。其方に任する兎も角も。煩ひとなりともいつそつやは死んだとも。どうなりとも言うてたも。其方を頼む此の儘に。大阪に置いてたも國へはいやぢやと手を合せフシ拜み。口說くもあはれなり。地傳内わつと聲をあげ。とかうも言はず歎きしが扨も〳〵あさましや。詞口と心が皆違うた氏より育ちが恥かしい。華美はすはなる身に染まりうはの空なる世にならひ。親の事も故郷の事も忘るゝ程のお心には。何時なり果てた情なや。心なき畜類も鳥は古巢を慕ひ。北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。地鳥獸もさうはない親無い者は身を樂に。旅他國致せども親の墓へ參るとて。百里二百里戻るもあり此の度お國の兄御樣。御知行拜領親御達は御隱居。髪をおろして樂々と御法體の筈なれども。おいとしやお袋樣つやが戻て二人の親が法體の。顏見たらばなんほう殘り多からう。ま二度髮のある顏をつやに見せ度いばつかりに。惜しからぬ頭の雪解ぐも撫でる。子の可可愛さ。早う連れて歸つてたも傳内樣頼みますと。家來の我等に樣つけて待焦るゝ親心。私ばかり悄々と戻つて生きてござらうか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人。堅牢地神の頂に釘を打つとの教あり。釘は鍛冶屋が細工にて打象ねはなされまい。曲もないお心や。我等が母はお前の乳母。養ひ君の顏見んと日を數へ指を折り。待ち憧るゝ母が心思ひやられてお袋樣の。御心底の痛はしや則ら母御の御文と懷中より取出し。地此の直筆を御覽ありとつくと御思案遊ばせ。私が腹立も皆おいとしさ故なりと。泣いつ叱つつ樣々に詞をつくし諫めしはフシ奇特に。も亦。あはれなり。地小かんも母の文と聞き押載き上書見れば。おつや殿參る母より此方無事と書かれしが。お筆に年の寄つた事十五の年此處へ來て。八年拜まぬ親の顏見たうなうて何とせう。生き身は死に身若しひよつと死病受けたりとも。かゝ樣の懷しさに臨終も仕損ひ。如何なる恥も曝さうかと案じ過しする程に。親の事は忘れぬ餘り叱つてたもんなと。文を顏に押當てて一フシ消え入り。絶え入り。泣きけるが。地封目切つて見たけれども。文體見たらば氣も落ちて。いよ〳〵心が引かれうず平樣に談合したけれども。襖一重が七重の關。一人の思案に落ち象ねて フシ暫し案じて居たりしが。地いや〳〵口で言ふは易い事どうなりとも間に合せ。今宵の所を遁れんと涙拭うてアアさうぢや。詞今とつくと合點した親には思ひかへられぬ。こちらをふつつと思ひ切り成程國へ下りましよ。地叔母樣も傳内も。今宵は歸つて明日早々といふ中にも。起請文を取られじと守袋を後手に。掛の戸を細目にあけそつと入るれば。男も心得受取りしが フシ二人の心の危さよ。詞叔母傳内も悅び御承引添し。とてもの事に彼の男の誓

紙を。只今破つてお見せなされよと言はせも果てず。ハテ思ひ切るからは起請はあつても反古なり。其の上誓紙は男の方へ渡して。茲には無いとぞ陳じける。いや〳〵今迄慎に守袋が見えました。地是非にお隠しなさるれば慮外ながら手をかけますと。言へば男は襖の中。見付けられては悪しかりなんと。守袋を戸の間より小かんが袖に。頓ひ〳〵返せしはフシいよいよ危き契りなり。地アヽ待ちや〳〵尋常に破らうと。守袋を解く内にも。サア二世の固めの起請文。破るは佛神三寶の守り目も切れ果てた。片時も生きて何にせん合圖の最期はこゝなりと。襖戸棚に肋骨を寄せ誓紙をひらき。南無阿彌陀佛と合圖の詞。さつと引裂き身をすり付け待てども内より音もせず。南無阿彌陀佛と引裂いては身を付け。引裂き〳〵男の及今や〳〵と最期を待てども。内には躊ふ恨みにや。静つて音もせずエヽ死ぬる事さへ叶はぬは。是が誓紙の罰ぞとて。ずん〳〵に引裂きてスエテども上りませ。いやなうこれ程胸が痞へて。夜食は思ひも寄らぬ事。歸つて夫にも悦ばせ明日見立に來ませう。それなら酒がようござらう。ハテなんの辭儀があるものぞ。酒もなんにもほしもない フシ閨を辿りて歸りけり。地傳内も氣草臥れ内衆酒の燗しやれ。一つ飲んで休み度し。集證も書付あるならば代物遣らんと言ひければ。心得たんほをつけ生姜鹽貝に花鰹。書出いたし算盤に フシ暫く時こそ移りけれ。地叔母も宿へ行き着く頃門をあけて立歸り。詞なう〳〵曾根崎の際迄行つたれば。中町の方が騒がしう。屋根へ上れのなんのといふ。地手過ちが氣遣でそれ故に戻つた。ヤア心許ないと内の男は追々に走つて出る。傳内刀おつ取つて鉢巻引締の裾からげ身拵へしつかと固めけに侍の心掛。奥へ入らんとする所へ内の者ども走り歸つて。詞アヽ氣遣ないく〳〵。盗人さうなが二人連。濱筋の星根傳ひ中町の辻へ下りて。福島の方へ走つたを

道通りが見付けて。聲を立てて騒いだ分。お騒ぎなさるゝ事でないと。地言へども叔母も傳内も先づおつや樣起しませうと。連立ち奥に入りけるが案の如く小かんはなし。是は〳〵と戸棚をあけつゝ庭の隅々詮索すれば。着替の帷子引きほどき庇の垂木に結び下げ。屋根へ越したに疑なし。なう悲しや小かんがるやらぬと。叔母が泣く聲落人ありといふ聲に。家内の男女驚き騒ぎ。扨は今のぢや程はない隨分追つかけ。死なぬ先つれて北野はあんまり近い。死んだら身體を梅田はこゝぢや。町衆迄に御厄介近頃御無心長柄へ走れ。八つの太鼓がでん〳〵でんほあとが屋とやの伊丹へ池田。茶屋中組中鶯籠の業國の侍交りしは。鬼に鐵鎚煎餅屋の。叔母は小橋へ三郎急ぎける。

平兵衛小かん夜の朝顔　下之卷

フシ除所のつらねも。我が命も。一筋切なるうきふしや。憂き身の果は主親のばちに

かゝりし三味線の。廿二三の絃切れて。殘る一期もしばしぞや。いかに今年のから梅雨もあはれ袂の五月雨に。スエテ心は今も五月闇。木の下闇にどまくれて。憂えし道も幾度か。フシオクリ同じ。ところに。まひ戻る跡に尋ぬる。願立に。神や佛の控へ綱小オクリのばす。命と知らばこそ。アヽ是又元の道なるわ。是も今來たフシ道ぞかし。此の世からさへ。踏み迷ふ。六道の辻聲束な。長地迷ふまいぞや迷ふなと泣くぞ迷ひの種ならしあれ寺町の鐘の聲。一二九十は七々の。七つの知死期最期もはや（さいごばやィ）ギンオクリときに。けらし狼狽へて白妙くゞる鼎頂。あだの露への朝顔も。本フシ今咲きかゝる花の露。それより先に凋む身は。明日の朝日に此の身體下さん曝さんあさましと。すがる涙の龍骨車に、フシあひの水さへまかすらん。世の中に。絶えて心中なかりせば。冷泉二世の。頼みもなからまし。誰かしそめし此の契り。スエテ音に聞きしは生玉の。それが始めのだい市之丞。つれて男も名の高き。大和の國や三笠山。笠屋三勝。鶯フシ舞の袖。褄と褄とを引寄せて。結ぶ無常の。薄煙千日寺の。フシはかなしや。別れしあとの寢姿は。夜半の鐘に目をさまし。かゝよ〳〵と乳呑子の歎きを捨てし修羅の道。魂は冥途に到れども魂となりたる今の世の。おつうは母のフシ形見ぞや。此の曾根崎に。埋れぬ。大阪三十三番に。名を殘したる。廻線補陀落や大慈大悲の。誓ひにて。地蓬には兜率天滿屋の。お初も佛仲間かや。道具屋おかめ與兵衛とは思へば近き町つゞき。太夫タヽキ世は何事も難波橋。ワキよしとあしとの二人境筋中に立ちたる賤が身は。不便と思へ備後町。それのみならず呉服屋の。歌手代半兵衛は彼の池田屋の。小菊にたんと金入なれば。心どんすな者でもないに。身のしゐすごしに氣は縮緬の。見世の帳面皆紬編子。らしやも無い事。いはしやりんすの。

はや人魂もとび紗綾抜いて。共に刄の諸羽二重の。同じ枕に。ノシふしつなぎ。重井筒の戀の水。掬び汲む手は多けれど色はさまゝ紺屋染。胸は萠黄に紅ひはだ。さやけき色は。これぞ此の。土賊に染めてさしもけに。心中みがく所縁かや。花紫に薄淺黄。桔梗セッテリ花色地。白がた。ヌエテ紺屋のの道ひろく。到り先立つ此の人々をオクリ今身の。上の知識ぞと頼む外には菩提をも。若きは別ちあら人神の。天滿の方に見ゆる火は。ワシ我を尋ぬる提灯か野邊の螢か。神の御燈か神垣や。神明宮にお暇の後世は鳥居の二柱。二人離れず立添へどこぼす涙の雨にさへ千代の。老松つれなくて地水火風の若草は。因果の嵐無常のわけ スエテ時を別たず。時ならぬ夏の枯野に迷ひたる。地曉露に身もひたれ。帷子裾にまつはれて。オクリ歩みへ。袋ねたるワシ二人がさま。是なう十里も來たるやうなれど。まだ此處にさまよふは此處で死ねとの神明樣の。スエテ敎へならめと泣きければ。問アヽあの町は老松町。叔母樣の家も二三町。地叔母樣の近くで死したらば緣に引かれて後の世は。親にもあひに藍畑藍より出でて藍より青く。罪より罪の重からん來世を待つこそ ワシ果敢なけれ。

地男剃刀取出し扨も因果な身の果やな。人は高きも賤しきも。死しては出家の剃刀を頂くものに極るに。其の剃刀で死ぬるかや生國は大和田原本。問幼少で二親に離れ今は在所の兄より外。一門眷族一人もなし。地鍛冶屋の鏈の一本立親兄弟とも頼みたる。親方には勘當うけ我が身ばかりか其方迄。殺して一家に愁をかくる此の科は。地獄の火焔に編かけ。無間の底の鐵床に載せられ。呵責の鏈に骨々を打碎かれんは今の事。よしそれは厭はねども其方は國の甲受け。六道の辻の憂き別れ是が今から悲しいと ワシ縋り。ついてぞ泣き居たる。地アヤ辛い事云うて下さんすな。私とても親叔母の心を背き歎きをかけ。幾顏の罪を作りし身が。善い所へはよも往くまい無間奈落の底迄も。此の手は放さぬこな樣もわしが手放してドさんすなと。互に引寄せ寄せられて ワシ抱合ひ。てこそ口說きけれ。地母樣のお文をも來世で讀まんと肌につけ。封目も切らねども親子は一世冥途にて。呵責に逢はば目も眩み妄執の雲に文字消えて。讀むも此の世の名殘ぞと親子の緣も封目も。切つて開きし文の中。問これなう貶斗と昆布とに節分の。まめで下れの祝ひごと。地今が冥途の門出と。御存じないかワシいたはしや。母樣常が血の道持ち長文書く事お嫌ひが。子の可愛さかこまゞゝと舟の中息災に。はやゝゝ下り待ち祝ひゝゝと遊ばせし。問父樣今年は丁七十の賀の祝儀。一門衆の振舞もそもじ下りを待受けて。生御魂の祝ひ一所によ。盆迄延ばすと書かれしが。地盆には我も新精靈親子の盃溝萩の。露の手向と引替へて。戴く我は草

葉の蔭さぞ父母のお歎きを。思遣られて情なや何事も〳〵。追付け目出たくめもじにて。申し〻〻候べく候めで度かしくとめられし。是が何の目出たい事子を祝ふ親心。無下になしたる身の罪科は。先の世からの約束か二枚重ねの御文を金水引にて綴ぢられし水引の紅落ちて。おつやといふ字は血に染みたり子の血は親の血の別れ血筋が教へて此の如く。先へ知らせのあるからは今の最期を物の告。さぞや夢見が悪からう明日は占夢違へ。違へても祈りても返らぬ後の悔言。いとほしの父母や名殘惜しの叔母様やと。文を抱きしめ肌につけフシ悶え。こがれて泣きけれは。地男も共に伏し沈み皆此の歎きは我故と。二人が膝にもたれ合ひフシ咽せ返りてぞ歎きける。あれ〳〵明星様も高々と明方に程は無い。此の文口にくへて未來迄も持ちまする。最期の苦患に離れたら含ませて下さんせ。念佛も心で申すこな様口で高々と。すゝめて殺して下さんせと。地文ひん卷いて確かとくはへ兩手は合掌心に念佛。顔で剃刀敎へつつ早うと急ぐ目許にも。可愛男を見をさめの涙は玉を列ねたり。夫も今を限りの詞さあとばかりに振上げて。見れば目もくれ二目とも塞ぎ俯向き南無阿彌陀。南無阿彌陀佛を力にて襟引寄せて剃刀の。柄までぐつと一刀突かれてうんと反返り三重のたうつ藍の〳〵蟲のフシ息苦しむ體に。地氣も遂ひ可愛〳〵ヲヽ可愛と共に苦しむ男の心。南無三寶後れじと落ちたる文をくる〳〵卷き。口押割つて含ませ。剃刀おつとり喉の周圍を切りさき切りさき。續くは首の骨ばかりフシ刀で切つたる如くなり。地ツメその剃刀の返す刃を。我が喉吭につく息も入る息もはや絶え〴〵の。同じ枕に死出の田長か(のィ)時鳥聞きに北野の藍畠藍に染めたる。魂魄と回向に。色をぞあけにける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜一等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾

竹本博敎

重而予以著述之本令校合候畢全爲正本者歟

近松門左衛門

大阪高麗橋壹丁目 正本屋 山本九兵衛版 山本九右衛門版